

## ソースタイン・ヴェブレンに関する研究の展望

—その問題意識を中心として—

- 1 ヴェブレン研究の復興とその問題意識
- 2 ヴェブレン評傳
- 3 ヴェブレン経済學の評價
- 4 ヴェブレンにおける技術主義とテクノクラシー
- 5 ヴェブレンとニュー・ディール及びケインズ
- 6 現代におけるヴェブレン研究の社會的意義

### 1

ソースタイン・ヴェブレン (Thorstein Bunde Veblen, 1857—1929) は 19 世紀末のアメリカ社會が生み出した特異な性格の社會學者、經濟學者、文明批評家であった。彼の死後ちょうど 4 分の 1 世紀の歳月が流れたが、彼の著作はいまでもアメリカにおいて意外と思われるほど廣汎な讀者層をもっている。また彼の學說や思想を研究しようとする學者はつねに跡を斷たないばかりか、最近にはヴェブレン研究が新たに復興しようとする機運をさえ示している。ヴェブレンの最も有名な著作である *The Theory of Leisure Class*. 1899 はその後 Modern Library, Mentor 版その他いろいろな版が出ている。マックス・ラーナー (Max Lerner) の編集になる *Portable Veblen*. 1950 も廣くよまれている。そして最近には、Stanly M. Daugert, Carl Eugster, David Riesman その他の學者によって、ヴェブレンの哲學や經濟學が改めて再検討されているのである。

このように最近に至ってヴェブレンに関する興味が再燃したのは何故であろうか。それはおそらく、最近内外の客觀的諸情勢に促がされて、人々の間に、アメリカの資本主義の性質とその運命に関する根本的な反省が高まったことの反映であろう。すぐれた古典についてはつねにそうであるように、人々はヴェブレンを鏡として、その中に各自の問題を映してみようとしたのである。言葉をかえていえば、人々はヴェブレンの理論をあるいは肯定し、あるいは否定することによって、現代のアメリカ社會についてのそれぞれのイメージに確證を與えようとしたのである。

Modern Library 版『有閑階級論』の編者スチュアート・チェイズ (Stuart Chase) はヴェブレンのかき残した書物を掘り起すことによって、アメリカ資本主義の

批判の武器をみいだそうとした。

「その他の概念や書物は一世代の間、暗闇の中はっておかれた。著者がそれらのものを『有閑階級論』以上に評價していたかどうかははっきり言えない。しかし、それらのものが評價されなかったとしたら、彼は感情を害したことは確かである。彼は 1919 年にかいた『技術者と價格體制』のテーゼがテクノクラシーの題目となって世界中に知れ互る以前に死んだ。彼はバリー並びにミーンズがその『近代株式會社と私有財産』の中で、1904 年に初めて出版された『營利企業論』のテーゼを多くの具體的事例で再述する以前に、またペコラがその金融資本に関する調査の中で、無数の實際の資料によって、ヴェブレンがすでに數年前に假借のない手厳しさで示した傾向を支持する以前に死んだ。」(op. cit., Xii)

また同じ書物のメンター版の編者ミルス (C. Wright Mills) は、アメリカ資本主義の現状に對する彼自身の見解を基準として、ヴェブレンの思想を再批判しようとしている。彼の見解によれば「ヴェブレンの理論は『有閑階級の理論』ではない。それは、ある國民の歴史のある時期における、上層階級のある特定の要素に関するひとつの理論である。それは、ヴェブレンの成長期に現われた成金の批判であり、19世紀後半の、ヴァンダービルト、グールド、ハリマンなどの、サラトガ・スプリングスやニューポートの、金ぴかのアメリカの批判である」と考えられた。ミルスはまたこうかいている。

「ヴェブレンの悪意は、彼の言葉でいえば『金錢的目盛の上端における富の蓄積はその目盛の下端における收奪を意味する』という假定に基いている。彼はつねに、パイは一定の大きさであって、富裕階級は下層階級から『できるだけ多くの生活物資』を引き出すものであるということを假定する傾向がある。」

「ヴェブレンは當時の移民大衆のことや、収入や富の甚だしく不平等な分配のことを考えていたために、経済のパイが膨らむ十分な餘地を残さなかった。——そして特に第二次世界大戦後に起ったことは、アメリカの住民の大部分が人目に立つほどの消費をなしうるということであつた。實際は『食うや食わずの下層階級』はいないのであるから、『術示的消費』という言葉は高い生活程度のいくぶん率直な表わし方となる。」(op. cit., XiV—XV)

ヴェブレンに関する研究はすでに今世紀の 20 年代から多くの學者によって試みられていたが、その場合においても、人々のヴェブレンに対する興味はつねにそれぞれの現實の問題を背景として成立していた。ミッチェルは主として景氣循環論の視角からヴェブレンの經濟學を研究した。コモズは「管理的取引」や「適正評價」の概念による彼自身の制度經濟學の根本思想をヴェブレンから學びとつた。1932年の頃、資本主義の修正の試みとしてのテクノクラシー學説が擡頭したときには、それに關連してヴェブレンの『技術者と價格體制』(*The Engineers and Price System*, 1921)が人々の注意をひいた。ローズヴェルト大統領によってニュー・ディール政策が行われ、ケインズ經濟學が學界を風靡した場合には、それらの社會改良主義的理論や政策を念頭におき、それとの關連においてヴェブレン思想を再検討することも行われた。さらに第二次世界大戦期においてドイツや日本において全體主義乃至は軍國主義が優越した場合には、それらの問題についてすでに第一次世界大戦直後に鋭い洞察を興えていたヴェブレンの達識が改めて人々を驚かした。そして最近には再びアメリカの資本主義の一種の危機意識とともにヴェブレンを再検討しようとする機運が高まってきたのである。以下われわれは、1920年代以來、ヴェブレン學説がいかなる人々によって、いかなる問題意識のもとに研究されてきたかを省みようとするのであるが、それはヴェブレン研究の現代的意義を明らかにするひとつのよすがとなるであろう。

## 2

ヴェブレンはひともしるように、そのやや奇矯な思想を、特異な用語と文體で表現した創造的思想家であつたが、その生涯も決して平安な人生行路ではなかつた。彼はミネソタのノールウエー移民の子として生れ、固有のアメリカ人社會とは隔絶した環境に育ち、學者となつてからも、その非社交的性格のために、シカゴ、スタンフォード、ミズーリ等の諸大學を轉々として歴任した後、カリフォルニアのパレアルトに孤獨で貧困な生涯を終えた。

ヴェブレンの思想はそのような彼の性格や生い立ちや、また彼がその中に住んだ當時のアメリカ社會と切り離しては考えることができない。だから、人々が彼の生涯について興味をもつことは當然であり、評傳も二三のものがかかされている。

そのうち最も詳細であり學問的であるのは Joseph Dorfman, *Thorstein Veblen and his America*, 1st. ed. 1934 (4th. ed. 1945) である。その書物はヴェブレンの經歷から彼の特異な思想の祕密に迫まろうとしたものであつて、著者はその序文の中でこうかいている。「學問の世界でソースタイン・ヴェブレンのような場合はめつたにない。『有閑階級論』が出版されてから 35 年の歳月が経つが、その著者は依然として神祕の人物であり、その見解は論争の對象となっている。ヴェブレンの經歷の探求が彼の業績の意味になんらかの光を投ずるのではないかという望みをもって、この研究は企てられた。」(op. cit., Preface) そのためにドーフマンはヴェブレンの親族、友人、知己、學友、先生、同僚などから、あらゆる資料を集め、當時のアメリカ社會の經濟的思想的發展を背景としてのヴェブレンの生活とその思想形成過程に關するきわめて詳細な記述を興えることに成功した。そこには、ダヴェンポートとの最初の會見の模様とか、エレン・ロルフとのロマンスとか、シカゴ大學の月給とか、晩年ヴェブレンの陰棲したパレアルトの小屋とかの興味ある挿話もとり入れられているし、ヴェブレンの著書論文の要領のいい要約もある。またそれらに対する當時の書評や反響も詳細に傳えられている。ドーフマンの敘述はいくぶん鋭さを欠いているけれども、きわめて周到、詳細であつて、ヴェブレン研究の好個の手引である。

R. L. Duffus, *The Innocents at Cedro. A Memoir of Thorstein Veblen and Some Others*. 1944 は著者ダフスが、1907年の夏から1908年の秋にかけて、1年ほどスタンフォード大學附近の Cedro Cottage に、ヴェブレンの學僕として一緒に暮したときの思い出をかいたものである。それは、ヴェブレンの最初の妻エレン・ロルフが彼のもとを去つた直後のことであり、スタンフォード大學の彼に對する態度も決して温かいものではなかつたようであるが、ダフスはそのヴェブレンの淋しい日常を温い同情をもって描いている。「セドロはある意味では、また暫らくはヴェブレンにとって一種のエデンの花園であつたと思う。その年彼と生活をともにした著者にとってそれが別の意味で花園であつたと同じように。彼はそれをつくつたのではないから、神がもとの花園に對して感じたような責任は感じなかつた。しかし彼は夕暮の涼しさの中に、また彼自身の夕暮の涼しさの中にその中に

足を踏み入れた。」(p. 159) ダフスはこうかいている。もっとも著者の敘述はややもすればヴェブレンよりも彼自身のことになりがちであり、その筆はペイソスにみち、ときには感傷的でさえあるが、それでも流石にヴェブレンの特異な人間のイメージを傳えている。

作家ジョン・ドス・パソス (John Dos Passos) がその有名な三部作のひとつである *Big Money* の中で試みたヴェブレンの生涯の描寫はすぐれた文學作品であると同時に立派な評傳でもある。ドス・パソスはスタンフォード大學からミズーリ大學に移った後のヴェブレンの生活 (1910 年頃) をきわめて簡潔に描寫して次のようにかいている。「彼の友人ダヴェンポートはミズーリ大學の就職の世話をした。コロンビヤでは彼はダヴェンポートの家の地下室に隠者のような生活をし、そのまわりの仕事の手傳いをし、自分でテーブルや椅子をつくった。彼はすでに小皺の網目でおおわれた灰色の顔、茶色の髯、黄色い歯の痛々しい中年男だった。彼の講義についてゆける學生はめったになかった。ヨーロッパからの來訪者があると、彼らが會いたがるのはきまってヴェブレンだったので、大學當局はしばしば驚きもし、いくぶん口惜しがりもした。」(U. S. A., The Modern Library, 1937. *The Big Money*. p. 101)

その外、ヴェブレンの死後に出版された論文集 *Essays in Our Changing Order*, 1934 の編集者 Leon Ardzrooni の序文には、ヴェブレンの有名な遺言がはいっているし、The Modern Library 版『有閑階級論』に對するステュアート・チェイズの序文には、彼がヴェブレンに招かれて晚餐をともにしたときのこときわめて生き生きと描かれている。Alfred Kazin, *On Native Grounds*, 1942, Henry S. Commager, *The American Mind*, 1950, Charles A. Madison, *Critics and Crusaders*, 1947, Daniel Aaron, *Men of Good Hope*, 1951, などもそれぞれの視角からヴェブレンの生涯とそのアメリカ思想に對する貢獻とを檢討している。

## 3

ヴェブレンは一面においてすぐれた社會學者であり、文明批評家でもあったが、彼の眞骨頂はやはりきわめて獨創的な經濟學者であることであつた。彼の最初の著作『有閑階級論』(1899) はその副題 *An Economic Study of Institutions* が示しているように、經濟學的研究であつた。その後出版された *The Theory of Business Enterprise*, 1904. *The Vested Interests and the Common Man*, 1919. *The Engineers and the Price System*, 1921. *Absentee Ownership and Business Enterprise in Recent Times*;

*The Case of America*, 1923. などもすべて資本主義社會における諸々の經濟現象を、instinct of workmanship, conspicuous consumption, pecuniary emulation, overcapitalisation, absentee ownership, sabotage of production by business, vested interests などの獨特の概念をもって鋭く分析し、批判しようとした經濟學的研究であつた。殊に *The Place of Science in Modern Civilization, and other Essays*, 1919 は古典學派、限界利用學派、歴史學派、マルクス主義などの從來の經濟學諸流派の理論を獨特の方法で批判するとともに、主としてチャールス・パース (Charles S. Peirce) やジョン・デューイ (John Dewey) の行動主義哲學 (Behaviorism) とスペンサー (Herbert Spencer) の社會的進化論とを基礎とする進化論的經濟學を主張しようとしたものであつた。そのような經濟思想は、俗流化した古典派理論乃至は限界利用學説にも、廣汎な歴史的事實の蒐集だけに終りがちな歴史學派にもあき足らなくなつていた當時のアメリカの經濟學界に異常なセンセーションを起したのであつて、その結果 20 年代以後にはヴェブレンの經濟學説を全體として研究しようとする機運が急速に高まつた。

この種の研究の初期のものとしては William Jaffé, *Les théories économiques et sociales de Thorstein Veblen*, 1924, 及び Paul T. Homan, "Thorstein Veblen." (*Contemporary Economic Thought*, 1928.) がある。ウィリアム・ヤッフエはアメリカ人であるが、パリへ留學し、パリ大學へ提出した博士論文としてヴェブレン經濟學の研究を企てたものである。Richard V. Teggart, *Thorstein Veblen; A Chapter in American Economic Thought*, 1932. もヴェブレン經濟學の研究として重要である。この書物の内容は第 1 章緒論・干涉主義 (Interventionism) の興隆、第 2 章ヴェブレンの生涯並びに著作に反映した文化的並びに知性的諸影響、第 3 章經濟科學の諸問題に對するヴェブレンの批判的接近、第 4 章ヴェブレンの建設的貢獻・社會批判の技術、第 5 章結論、ヴェブレン主義の意義からなっており、それにヴェブレンの著作並びにヴェブレン研究の詳細な書目がつけ加えられている。テガートはヴェブレンの著作の意義を次の點にみいだしている。

「ソースタイン・ヴェブレンの諸著作の眞の意義は進歩の干涉主義理論のひとつの表現としてのみ理解することができる。彼にとっては、經濟生活の『過程』にはひとつの眞實の運動がある。彼は、自然主義理論家の制度や信念はこのより本質的な運動を基準としてみた場合には擬似的眞實のものであるとみなした。ヴ

ヴェブレンの知性の焦点は社會學者の立場とマルクス主義唯物論者のそれとの間を行ったりきたりして彷徨している。彼の著作は辯證法の巧妙な形態である。すなわち彼は自然主義思想のあらゆる命題に反對命題を對立せしめる。できるだけ廣汎な光りのもとにみるならば、あるひとつの體制の自然主義概念に對する彼の特徴的な對立物は、體制は存在しないのであり、あるものは一般的經濟變化の過程——一元的過程——だけであるという彼自身の命題である。」(p. 13)

テガートはこのような立場からヴェブレン思想を統一的に理解するとともに、アメリカの經濟學說の發展過程におけるヴェブレンの地位を確定せしめようとしている。著者は、この書物の序文の中で、「ソースタイン・ヴェブレンの思想に關し、多くのアメリカ經濟學者によってつくられた個々の凹みにもかかわらず、彼の理論の全面的な批判的検討は少しも行われなかった。ヴェブレンはウィリアム・ヤッフエ並びにボウル・ホーマンによって研究されたが、その結果はいずれも彼の全著作の一貫した知識を表わしていないし、また Theo Suranyi-Unger のいうところによれば『現代のアメリカ經濟學の最も深遠な思想家の1人』の知性の背景を十分に示唆してもいない。」(Vii) とかき、きわめて野心的な抱負をもってこの書物を著わしたようにみえるが、その抱負はある程度まで實現されているように思われる。

ヴェブレンの門弟の1人であるウェズレー・ミッチェル (Wesley C. Mitchell) が、その編集にかかる *What Veblen Taught. Selected Writings of Thorstein Veblen*, 1936 の序文としてかいた “Thorstein Veblen” も、ヴェブレン學說の全般的理解を試みたものとして見逃すことができない文獻である。

もともとミッチェルはシカゴ大學において哲學と經濟學を修め、中でもジョン・デューイーとヴェブレンから多くの學問的感化をうけた。彼はその間の消息をジョン・モーリス・クラークに宛てた書翰の中で次のようにかき表わしている。

「その間私は哲學と經濟學の中に何か非常に興味深いものを見出していました。ジョン・デューイーはあらゆる種類の題目の下に講義を行っていましたが、そのどれもが同じ問題—われわれのものの考え方—を取扱っていました。……そして、誰でもが自己の手で建設的な理論化を試みようと思うならば、デューイーの考え方が道を示してくれました。消費者が三段論法でそのコースを進むと考えるのは間違いです。—彼らはせっぱつまらなければ考えません。彼らが何を行うかを、一定の原理から演繹する道はありません。彼らの

行動はそれ自身合理的なものではないからです。私たちは彼らが何を行うかを見出さねばなりません。それが觀察というものですが、經濟學者はそれをあまりにも軽んじていました。われわれが學者の精神作用を問題としてとり上げると、經濟理論、中でも正統派流の理論は魅力のある題目となりました。……

もちろんヴェブレンはこの種の考え方にぴったりと當てはまります。私を彼にひきつけたものは彼の藝術家的な面でした。……ほんとに觀念と遊ぶことができるひとがいました！ 誰でも理論を紡ぎ出す遊戯に耽ろうと思っても誰が彼のような巧妙さと機智に對抗したでしょうか。しかし、正統派經濟學の標準の方法が科學的試練に耐ええないということを私が確信するのに何かが入用であったとしたら、それはヴェブレンのもう1つの前提から、彼の眩惑的な演技で、それ以上確實なものはないというものをえたことです。」(1928年8月9日付のクラーク宛の書翰. J. M. Clark, *Preface to Social Economics*, 1936, p. 410)

このようにしてヴェブレンに深く傾倒していたミッチェルは *What Veblen Taught* の序文においても、ヴェブレンの思想への深き理解を示した。彼は古典派經濟學の批判者としてのヴェブレンの根本的立場を、同じ批判者としての歴史學派乃至はマルクス主義とは異なる第三の立場として理解し、次のようにかいている。

「彼〔ヴェブレン〕の時代のすぐ前にドイツ歴史學派は正統派經濟學の相對性を意識していた。しかし彼らは彼らが輕視し廢棄した學說に對する科學的代替物をつくり出さなかった。カール・マルクスは一層建設的であった。ヴェブレンの見解によれば、マルクスはペンタムから引き出した淺薄な心理學やヘーゲルから引き出した浪漫的形而上學によって不利な負擔をもっていたけれども、文化分析において勇敢な端緒をつくった。ペンタムの影響はマルクスを驅って階級利害の平凡な理論を展開せしめたのであって、その理論は、實業家の金錢的職業によってある種の思考慣習が彼らの中にしみ込んでゆき、また賃金労働者がその中に捉えられている機械過程によって全く別の思考慣習が彼らの中にしみ込んでゆく仕方を看過した。ヘーゲルの影響はマルクスの社會進化理論を本質的には社會主義の最後の段階の『階級なき經濟構造』の目標に至る知性的繼列たらしめたが、ダーウィン主義の思想體系は『趨勢も、最後の段階も、完成もない盲目的な累積的因果關係』をみるものである。したがってマルクスは機械時代に當てはまるような科學的分析の狭い軌條から逸脱して、社會革命への彼の希望をみだすような未

來に關する樂觀的なヴィジョンに到達した。必要な作業計畫を與えるところのダーウィン主義的立場は社會科學者の間に擴がってゆくであろうが、それは、それが先行者よりも形而上學的でないとか、眞理に近いとかのためではなく、20世紀の日常の仕事によって忘れられた思想によりよく調和するためである。經濟學者の大多數がいまなお傳統的分析にすがりついているのは、ヴェブレンにとっては、社會理論の文化的おくれ—制度的接近によってすぐに説明がつくようなおくれ—の最近の事例にすぎないのである。」(xlix)

ミッチェルがその序文の末尾に記した美しい言葉もヴェブレンの深い理解を示す言葉としてみ逃すことができない。

「異端者というものは、自分が永久に正しく、必ず將來には酬いられるという確信に支えられていても高邁な心が要る。自分の思想が明白にならなければ思想界に迎えられないと思う異端者はさらに確固たる勇氣が要る。ヴェブレンはそのような勇氣をもっていた。彼はその安らかでなかった生涯を通じて謎のような微笑をもって外部の敵意と内部の懷疑にたたかった。未來に何が待っているか判らなかつたけれども、彼は日常の仕事に最善をつくし、觀念と遊び、『す早い機智とゆっくりした皮肉』を人々に投げかけながら哲學者の喜びを味わった。事態がどうなるとも、それはしばしばうまくいかなかつたが、彼は決して知性的妥協をしなかつた。彼は1929年8月3日、カリフォルニアの美しい海岸の丘陵の隠居所で、最後に至るまで『靜かな不信者』として死んだ。」(xlix)

ミッチェルはその永き學問的生涯を通じて景氣循環の研究に主力を注いだが、その場合彼はつねにヴェブレンの進化論的概念を基準としていた。彼の見解によれば、景氣循環は全體活動の單なる變動ではなく、經濟を通じて廣く擴散する變動である。従つてそれは文化の一所産であり、經濟活動が主として貨幣所得の收得や支出を基礎として組織される場合に初めて發生するものである。また景氣循環は均衡の部分的偶然的攪亂ではなく、經濟組織自體によって體制的に發生する變動である。繁榮が累積すると各産業部門の生産費が販賣價格に喰い込み、貨幣市場は逼迫し、多くの投資計畫は資金コストが好轉するまで留保される。企業體制内部のこのような累積的緊張が活動の後退に導き、それが經濟全體に擴がり、勢いを増す。しかし、生産費と價格との調整、在庫の收縮、銀行準備の改善その他の不況の發展は次第に活動の新たな擴張のための道を平にする。景氣循環のそれぞれの段階は進化を遂げてその後繼者となってゆく。一方、經濟

組織自體は漸次累積的變化を遂げる。従つて、ミッチェルは「各世代の經濟學者は若いときに學んだ景氣循環理論をつくり直すのを當然と考えるようになる」と信じたのである。ヴェブレンの經濟學理論はミッチェルにおいて1つの美しい實を結んだのである。

## 4

ミッチェルと相並んでヴェブレンの影響を最も強くうけたものはジョン・ロージャー・コモズ(John Roger Commons, 1862—1945)であるが、彼の場合においては、單にヴェブレン經濟學を深く研究したばかりでなく、それを獨特の仕方に理解し、彼自身の經濟學體系—いわゆる制度經濟學(institutional economics)—の礎石たらしめた。コモズはその *Institutional Economics*, 1934の中に特に「ヴェブレン」と題する一節(p. 649—677)を設けているが、そこで彼はヴェブレンの思想の核心を正しく捉え、それを制度經濟學に至るまでの經濟學的思考の發展史の中に正しく位置づけるとともに、それをよすがとして、管理的取引(managerial transactions)、適正價值(reasonable value)などのコモズ獨特の經濟學的概念を展開せしめたのである。

コモズが特に注意したのは、單なる金銭的營利活動の主體としての資本家から區別される技術者の社會的地位に關するヴェブレンの考え方であつた。この點についてコモズはいう。「ヴェブレンは……資本家の代りに技術者を社會過程の先端に位せしめようとするあらゆる現代の計畫の知性的創始者となつた」(*Institutional Economics* p. 659)と。コモズの見解によれば、ヴェブレンの理論は、經濟的事實の均衡や調和の正統派的靜態理論の代りに、資本家的所有のサボタージュにかかわらぬ富の生産者の知識、科學、技術、慣習などの進化論的理論である。したがつて、機械、商品、自然資源などの正統學派並びにマルクス主義經濟學の物質は經濟學の主題として消滅し、技術者を先頭とする技能本能の應用的知識や習慣として再現する。この點においてヴェブレンは正しかつた。というのは舊來の經濟學者の物質は現われたり、消えたりする使用價值にすぎず、われわれが管理的取引の中に解消せしめるものの繼續的反覆や回轉によって更新され、造出されるものであるからである。新しい物質を持続せしめ改造せしめるものは知識、習慣、發明である。何となれば、それらのものは教育、傳統、經驗、實驗、調査などを通じて數時代にわたつて展開する人間の能力であるからである。この知識は單に技術的なものであり、ヴェブレンの言葉をもってすれば「人間が生計を營むに當つて取り扱わねばならない物質の物理

的行動に関する事實的知識であり、…礦物、動植物が有用であるというのは一換言すればそれらのものが経済的であるというの、—それが社会の生活手段に関する知識の範囲内にもたらされたことを意味するものである。

コモンスはヴェブレンの「技能本能」(instinct of workmanship)とその社会的機能をこのように理解することによって、それを彼自身の「管理的取引」の概念に結びつけたのである。コモンスはいう。

「これこそは、正統派経済学の基礎を形づくった物質に対してさえも制度的性格を與えるものである。われわれが『物質』や『労働』の物理的概念の代りに『管理的取引』を代置するのはそのためである。物質は減價、廢用及び消費によって急激に回轉する。しかし、その更新と能率増進を保たしめるものは、管理的取引の進化的性格によって、ある時代から次の時代に手渡される傳統、慣習及び革新であり、ヴェブレンが一種の『具象化』によって、『産業の非物質的設備、社会の無形資産』と名付けたものである。この『非物質的設備』は相續され、移讓される。というのは『當該の本能が價值あらしめるものは、客觀的目的の意識的進展である』からである。」(op. cit., p. 660)

ヴェブレンは「産業」(industry)と「企業」(enterprise)とを二律背反的なものとして峻別し、後者の主體としての資本家の營利活動に對して、前者の主體である生産的技術者の「技能本能」と「能率」を尊重したが、コモンスも能率をもって「親方職人、技師、工場監督によって行使される」意識的統制であると考え、それは「一定の物質的設備がどの程度まで有効に『資本財』と呼ばれるかを決定する」と考える。したがって彼の見解によれば、ヴェブレンの物理的資本は事物の一定の量ではなく、「支配的な思考慣習」によって指導される有用性の變化過程となる。コモンスはいう。

「資本は蓄積労働の過程の生産物の累積ではない。資本は人類の奉仕のために親方職人によって導かれる産業的知識や経験の繼續的工場設備 (going plant) である。資本はフォードとその數千の労働者であり、フォードの著書 *My Life and Work* はヴェブレンの實踐である。」(op. cit., p. 662)

このような能率や資本の概念はコモンスの「適正價值」の概念に連なる。というのは、適正價值というのは、個人的評價によってきまるものではなく、裁判所、産業委員會、資本家、科學的經營者、労働者などの集團活動 (collective action) によってきまる社会的價值であり、そのような價值が社会的福祉の向上と保障を約束すると考えられるからである。

コモンスはニューディールをもって「農民、労働者、小商人、自由職業家などの支持する集團的民主主義であり、大資本家、大金融業者の政治的支配に對する前者の組織的反抗の表現である」といい、適正價值はそのような民主主義の下において初めて實現すると考えたが、そのような考え方はヴェブレンの「技能本能」もしくは「技術者のソヴィエト」の概念と一脈相通するものをもっていたのである。

ヴェブレンの一種の技術主義はたしかに晩年の彼の思想の1つの結節點であったが、1932年の頃には、テクノクラシー (Technocracy) 運動の擡頭と結びついて、特にこの視角からのヴェブレン研究がきわめて旺盛となった。その年の8月、ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙は「10年間の調査は『價格制度』の終焉を示す」という表題の下にコロムビア大學のハワード・スコット (Howard Scott) を中心とするテクノクラットたちの恐慌對策を含む一種の社會改良理論を紹介した。彼らはコロムビア大學の工學部を本據として10年間「北米エネルギー調査」の仕事に従事した後、その結果をもって技術主義にもとづく一種の社會改良計畫を提唱したのである。テクノクラシーがそれである。その場合スコット一派の人々は價格體制の代りにエネルギー計算にもとづく合理的數理的な基礎の上に經濟組織を再編成し、それによって「豊饒の中の貧困」(poverty in plenty) という社会的矛盾を克服しようとしたのであるが、そのような考え方はすでにヴェブレンが、1921年に著わした *The Engineers and the Price System* において提唱したところのものであった。ヴェブレンは右の書物の中でこういった。

「いまや必要な技術的知識や経験をもつそれらの才能があり、訓練をうけ、経験を積んだ技術者たちは、一國の生産的産業を運営する日常の活動の第一の不可缺の要素であるということになる。彼らは事實、産業體制の參謀總長となっている。……『産業の將帥』はいまなおその差別を自負心をもって主張しているし、法律・慣習も彼らの要求をみとめているが、その將帥たちは實際には何らの技術的價值をもっていない。

それゆえに、アメリカもしくはその他のすべての先進工業國における革命的轉換の問題は、實際問題としては、技術者のギルドが何をなすかの問題に解消される。要するにそれは、一國産業の經營の指導と責任が特權階級の代辯者であるフィナンシャーから、繼續關係としての産業體制の代辯者である技術者に移るかどうかの問題である。……アメリカのソヴィエトのような機會はそれゆえに、技術者のソヴィエトの機會である。」(op. cit., p. 133—134)

ヴェブレンはこのような思想にもとづいて、1920年、スコット、シュタインメッツ (C. P. Steinmetz), アッカーマン (F. L. Ackerman), チェーズ (Stuart Chase) などとともに、ニューヨークに「技術者連盟」(The Technical Alliance) なるものを結成し、技術主義による社会改良運動を企てた。そのときの運動は必ずしも活潑ではなかったけれども、それから十数年を隔てた1932年になってテクノクラシー運動が大きなセンセーションをまき起したのである。それはヴェブレンの再生を意味していた。コールマン (McAlister Coleman) は1933年1月発行の *The World Tomorrow* に「ヴェブレンの復歸」(“Veblen Comes Back”) と題する論文をかいた。ジャーナリズムは「ソースタイン・ヴェブレンはテクノクラシーの理論的創始者である」と宣傳し、『技術者と価格体制』を「テクノクラシーの聖書」とよんだ。出版元ではすぐに同書の再版を出したが、それは毎週150部の割りで賣れ、忽ちベストセラーとなった。

もっとも、ヴェブレンの思想がどの程度までテクノクラシーに影響を与えていたかについては問題がある。ハロルド・ラッグ (Horold Rugg) は、その *The Great Technology* において、*The Engineers and the Price System* を構成している諸論文はスコットの影響を受けたものであると主張したし、テクノクラットのパンフレットも「この點に関する思索はインスピレーションの源泉としてソースタイン・ヴェブレンの著作に注意を集中せしめ、特に原動力として *The Engineers and the Price System* をあげているが、そのような結論は全く事實に反する」とかいた。しかし、その優劣順位はいずれにしても、ヴェブレンが勤労者の世界観と結びついた一種の哲学をもっていたことは事實であり、それが1932年という時點において人々の關心となったことは興味ある事實である。

なおシカゴ大学のエイブラム・ハリス (Abram L. Harris) 教授は、*The American Economic Review*. Vol. XLI. 1951 によせた “Veblen and the Social Phenomenon of Capitalism” においていくぶん批判的な立場からヴェブレンの技術主義的社會改良理論に觸れて次のようにかいている。

「彼〔ヴェブレン〕は、もしも産業の經營が技師その他の技術的専門家の手にまかされるならば物質的福祉はいちじるしく改善されるであろうと主張する。しかし、もしも彼が考えるように産業の操業がすでに官僚的なルーティンとなってしまうとするならば、技術者や科學的専門家による經營はこのような事態を一層強めるだけであろう。ヴェブレンは彼の『技術者

のソヴィエト』がいかにして、またいかなる基礎の上にその決定を行うかを語っていないし、またこのような技術者による支配はいかにすれば社會の残りのものに對する獨裁的權力となることから防ぎうるかをも示していない。」(p. 77)

## 5

1930年代の恐慌期においては1929年に他界したヴェブレンの學問がますます高く評價されたようにみえた。それは彼が *The Engineers* や *Absentee Ownership* において豫言したことがすべて事實となって現われたからであった。株式會社金融に關する上院委員會の調査はヴェブレンが “Some Neglected Points in the Theory of Socialism” (1892) において近代企業の必然的隨伴物として示したことが事實であることを明らかにした。ローズヴェルト政府の農務省長官となったヘンリー・ウォレス (Henry A. Wallace) は「ヴェブレンは當時の他のいかなる經濟學者以上に、現在起りつつある多くのことの不可避性をみた。……彼は多くの種子を蒔いたが、それは不可避的にわが國の將來に深甚な影響をもつであろう」といった。ローズヴェルト大統領のニュー・ディールも直接間接ヴェブレン思想の影響を受けていた。

マックス・ラーナーは *Portable Veblen*, 1950 の編集者序文の中でこうかいている。

「ヴェブレンがニュー・ディール及びニュー・ディラーズに對して影響を与えていたということはしばしば指摘される場所である。彼の死後數ヵ月して大恐慌が起ったが、それは彼が教えたものの多くを確證したようにみえた。1933年乃至1938年の間政府機關のスタッフとなっていたものの多くは若き經濟學者や法律家であったが、彼らにとってはヴェブレンは傳説上の人物であった。しかし彼は繁榮時代には危険人物であった。彼は經濟の鐵則などはないのであり、人間のつくった經濟制度があるだけであるとかいた。それならば何ゆえに、新しい行政的統制によってその制度を改造しないのであるか。……このような營利的企業の理論を與えられてニューディールは論理的な進んだ措置をとった。彼らは、實業界の勢力の恣意的な行動が經濟を破滅せしめ、人間や機械を遊休せしめることから防ぐために政府の反對勢力の體制をうち立てることを試みた。彼らは實業集團の僕婢ではなく、その主人となるような政策をつくらうとした。かくして、本來經濟の領域における力の理論であるところのヴェブレン主義は政府の領域における力の計畫に導いた。」(op. cit., p. 31—32)

全國産業審議會の會長ヴァージル・ジョーダン (Virgil Jordan) も「現在の經濟的、政治的並びに社會的状況と現下の政府政策に對するヴェブレンの影響はおそらくアメリカの他の思想家の誰よりも大きかったであろう。誰でもヴェブレンとその思想を知らずしては、今日わが國に起りつつあることを十分に理解することができない。」といった。學界に對するヴェブレンの影響もいろいろな具體的な形をとって現われてきた。殊に同じく 1934 年に著わされたマンフォード (L. Mumford) の *Technics and Civilisation*, スチュアート・チェイズの *The Economy of Abundance* 及びジョセフソン (Mathew Josephson) の *Robber Barons* はいずれもヴェブレンの影響の下にかかれたことが、それぞれの著者によって告白された。ヴェブレンの著作はますます廣い讀者を獲得したようにみえた。1930 年 2 月 1 日乃至 1934 年 9 月 1 日の間に約 5,000 部のヴェブレンの著作が賣れた。そのうちの半分以上は *The Engineers* であり、きわめて難解な *The Place of Science in Modern Civilisation* がそれに次いだ。『有閑階級論』は第三位で 500 部以下であったけれども、それは間もなくヴェブレンの最もポピュラーな書物となり、1934 年 9 月には Modern Library の廉價版がつくられた。

このような雰囲気の中で多くの學者によってヴェブレンに關する研究が行われた。テガート、ドーフマン、コモンスなどのヴェブレン研究が公刊されたのもすべてこの時期のことであった。1936 年にはイギリスのホブソン (J. A. Hobson) が『現代社會學者』叢書の 1 冊として *Veblen* をかいた。この書物は「彼の時代と國の歴史の經濟的決定論の中に集約されているヴェブレンの人類學的、生物學的、心理學的な種々の接近に關する判り易い記述」を與えようとしたものであって、特に際立った特色をもっていないけれども、ホブソンはこの書物の中で、一方ではヴェブレンをアメリカの代表的社會學者として高く評價するとともに、廣くヨーロッパ各國の歴史や經濟構造を背景としてヴェブレンの理論に批判を加えることを試みている。その論點の 1 つは、アメリカ社會の現實を基礎として構築されたヴェブレンの理論は、その他の國の現實には必ずしも當てはまらないということであった。ホブソンはいう。

「これらの鋭い分析方法は、ヨーロッパの資本主義諸國に適用され場合には、アメリカにおけるほど積極的でない多くの限定的な、また相殺的でさえある動機や運動によって曇らされるであろう。産業經營とは異なる金銭的支配の組織はヨーロッパではそれほど進んではおらず、多くの基礎産業においては國家の所有や規

制によって抑制され緩和されていた。法律や司法はどこでも下層階級の平等な自由と矛盾するような財産權や不平等の重い負擔をもっているけれども、アメリカで行われているような甚だしい腐敗は多くのヨーロッパ諸國ではそれほど一般的ではない。」(op. cit. p. 223) しかしながら、ホブソンは「このような事情は、産業的金融的方法において發達したあらゆる國の近代的發展過程に對する直接の經濟的關連並に間接の社會的關連におけるヴェブレンの中心的分析の本質的な健全性をそこなうものではない」ことをみとめ、ヴェブレンがきわめて印象的なやり方で歴史の經濟的決定のこのような影響を解明した點において、彼を現代の最大の社會學者の 1 人とみとめているのである。

ニュー・ディールはしばしばヴェブレンと結びつけて考えられたけれども、それはまたしばしばケインズの「新しい經濟學」とも關連をもっていたと解釋されている。それは、社會保障政策による總需要の増大と公共投資による投資の誘發とを基調としていた後期ニュー・ディール政策がケインズの雇用理論と目標を共通にしていたためであった。それではヴェブレンの理論とケインズのそれとは共通のなにもものかをもっていたであらうか。1930 年代後半乃至は 40 年代においては、この問題がヴェブレン研究の 1 つの新しい焦點となっていたようにみえる。

マックス・ラーナーは正統派經濟學に對するヴェブレンの不屈の孤立的な闘争の足跡を記述した後にこうかいた。

「にもかかわらず、經濟學は決して彼〔ヴェブレン〕の攻撃から十分に回復しなかった。ヴェブレンは勝利者として現われなかったけれども、彼の攻撃目標であった經濟學體系も同様であった。戦いはまだ終わっていないのだ。戦いはヴェブレニアンとその經濟學の「制度學派」の勝利とはならなかった。しかし、戦いはすでに古典派や限界利用學派の敗北となっている。典型的にみて新しい經濟學は『ケインズ革命』の形態をとったが、それはもはや下界の人民への神の道を辯護しようとはせずに、生活の制度的事實のあるものをみとめ、性向や慣習を基準として貯蓄や投資を論ずる。」(Portable Veblen. p. 31)

ラーナーの見解によればヴェブレン學派は、論理的に、實業界の強制に對抗し、價格體制を、サボタージュや不況なしに作用せしめるような政府統制の體制に導くものと考えられる。同時にラーナーはケインズ理論をもって、自由競争體制とは異なる制度的事實をみとめ、性向、慣習などの制度的心理的要素を尊重する點において、古典派



理論から乖離しているものとみなしている。つまり彼はヴェブレンとケインズとの間になんらかの類縁性をみいだそうとしているのである。

ところが、ジョン・ガムス (John S. Gams) はこれとは全く反対の立場をとっている。彼は *Beyond Supply and Demand. A Reappraisal of Institutional Economics*. 1946. において、最近ケインズの理論がヴェブレンの強大な影響力に競争して若き人々の興味を獲得したことをみとめながら、「もしもヴェブレンが生きていたならば、彼はおそらくケインズを灰にしてしまう道徳的義務を感じたことであろう」(p. 6) とかいているのである。ガムスはヴェブレンが生きていたとしたら、ケインズに対して言ったであろう言葉を想定して次のようにいう。

ケインズは、投機が目立って減り、市場、殊に株式市場の適当な社会的目的が回復されるであろうという楽観的見解をもっていたけれども、ヴェブレンはこう言ったにちがいない。そこには、よき商業取引と悪しき取引とがあり、よき取引は社会的に望ましい結果をもたらすと考えるような規範的古典的な経済理論が少しも變らず残っている。いずれにしても投機統制案に対する批判はケインズの計畫のその他のものにも當てはまるであろう。すなわち、平和経済のもとにおける永続的な完全雇用と營利的企業の精神との間には決定的な不一致があるのであり、アングロ・サクソン諸國はその兩者を永く保持することはできないであろう。

「最後に、そしておそらくそれが根本的なことであるが、ヴェブレンは貯蓄・消費・投資理論家の因果的方法論を排斥したであろう。人間の経済行動はきわめて複雑なものであるから、景気循環のようなわれわれの生活の中に網目のように深く入り込んでいる現象については二三の決定因をとり出すことは許されない。ヴェブレンはミッチェルと同じように、景気循環の問題は全経済の機態に関連していると言ったにちがいない。」(op. cit., p. 7)

もともとガムスのこの書物はヴェブレン並びに新ヴェブレン主義の心理學的前提と方法論とを深く掘り下げて探求した書物であって、ヴェブレンの理論とフロイドの精神分析との関連を究明した点とか、ヴェブレンの根本思想がミッチェルにその他の新ヴェブレン主義者によって必ずしも正しく繼承され、發展せしめられていないことを指摘した点とかにおいてきわめて創見に富んだ業績を示している。それは必ずしもヴェブレンとケインズとを對決せしめた研究ではないが、しかしガムスは、何ゆえにヴェブレン並びに制度學派の再評價を行うかの理由の1つとして「ヴェブレンは、われわれが流行のアング

ロ・サクソン理論家ジョン・エム・ケインズの理論をよりよく評價するための背景を與える」ことを指摘している。この点においてガムスの書物はやはり、ヴェブレン研究における新しき問題意識を反映するものである。

なおヴェブレンとケインズに関するより立ち入った論議としては Rutledge Vining “Suggestions of Keynes in the Writings of Veblen” (*Journal of Political Economy*, XLVII, 1939, pp. 692—714) があるし、Allen Gruchy, *Modern Economic Thought*, 1947 にもある程度の論述がみられる。

## 6

第二次世界大戦後においては再びヴェブレンに関する研究が各方面において活潑にとり上げられているが、それは、その段階においてアメリカ社會自體が直面した諸問題によって觸發された場合が多かった。最近アメリカ社會が直面している問題は、國內的には生産力の急速な發展とドルの支配圏の驚くべき擴大にもかかわらず、なお依然として體制的不安定を脱しえないアメリカ資本主義組織をどうするかということ、また高度の經濟集中に伴って發生したところの、ケインズの理論をもさえも危険視するような保守的反動思想とそれに對抗する急進思想との對立をどうするかということであり、國際的にはソ連その他の共産主義諸國の經濟的・政治的發展に對していかに對處するかということである。最近におけるヴェブレン研究はいずれもそのような問題意識をいだきながら、いまや古典的存在となったヴェブレンの業績をあるいは肯定的に、あるいは否定的に再検討しようとしているのである。マックス・ラーナーの *Portable Veblen* に寄せた編集者序文も、カール・オイグスターの研究 (Carl Eugster, *Thorstein Bunde Veblen, 1853—1929. Darstellung und Deutung Amerikanischen institutionellen Denkens aus Seinem Werk heraus*. 1952) も、デヴィッド・リースマンの批判的研究 (David Riesman, *Thorstein Veblen A Critical Interpretation*. 1953) もみなそうである。スタンレー・ドウガートの哲學的研究 (Stanley M. Daugert, *The Philosophy of Thorstein Veblen* 1950) さえも現代の問題意識と無縁ではない。

マックス・ラーナーは 1950 年にかいた「序文」の中でヴェブレンとニュー・ディール並びにケインズとの關係を論じたばかりでなく、ヴェブレンとマルクスとの比較、ヴェブレンの著作における革命的含意、ソ連とアメリカの社會體制に関するヴェブレンの評價などの問題にも觸れている。彼は「彼〔ヴェブレン〕の仕事の革命的含意を低く評價することは重大な誤りであろう」といい

次のように書いている。

「技術は全人民の創造であって不在所有者の創造ではないというヴェブレンの繰返した主張は、アメリカの大資本の全道徳的地位を削り取る唯一の主張である。アメリカの夢は政治的経済的生活における機會均等の夢であった。ヴェブレンは民主主義の理想に言及することを注意深く避けたけれども、彼は株式企業勢力の分析を行い、それがその夢の幻滅の古典的説明となったのである。最後に、破壊の技術が、多くの人をして、次の戦争は人類の墓場となるかもしれないことを悟らしめているときに、平和は價格體制の廢止を要求するというヴェブレンの理論は、社會主義を文明の生残りと同視する結果となる。」(op. cit. p. 36)

マックス・ラーナーはまた、ヴェブレンの思想體系においてはロシアとアメリカのいずれが自由國と考えられ、いずれが專制國 (dynastic State) と考えられるか、という問を出し、次のように答えている。

「しかし、ロシアとアメリカの比較に立ち歸るならば、次のような結論を避け難い。ヴェブレンの思想體系においては、獨裁制なき價格體制は、價格體制なき獨裁制よりもより多く專制國家の様相をもっている。」(p. 39)

1952年に出版されたカール・オイグスターの著書は、彼がシカゴ大學に留學した後、チューリッヒ大學に提出した博士論文であって、第1部基本問題、第2部社會學、第3部歴史、結論という構成をもち、ヴェブレンの社會學、經濟思想に関するきわめてよくまとまった著作であるが、オイグスターはその第8章「アメリカの場合」において特にヴェブレンの *Absentee Ownership* に現れたアメリカの資本主義批判を評論し、その意義を高く評價している。オイグスターは、マックス・ラーナーと同じように、おそらくその影響の下に、「營利經濟的、專制的、國家主義的なあらゆるものの反社會的性格」(S. 101)を指摘し、普遍的科學と創造的技術だけが人間の問題を解決すると考えた點に、ヴェブレン思想の本質をみいだしているのである。なおオイグスターのこの書物はその巻末に豊富な、また國際的なヴェブレン研究書目を掲げている。

1953年にかかれたリースマンのヴェブレン研究は従來の諸研究を廣く參照した力作であるが、著者の立場は相當保守的であって、ヴェブレンの諸論點について、假借なき、ほとんど惡意的ともいふべき批判を加えている。例えば *Imperial Germany and the Industrial Revolution*, 1915 や *The Nature of Peace*, 1917 や, "The Opportunity of Japan" 1915 などに現われたヴェブレンの社

會體制に關する思想と、その學說史上の地位についても、リースマンははっきりと否定的な態度をとっている。ヴェブレンはそれらの著作において、ドイツや日本のようにアングロ・サクソンの近代工業技術と專制的國家形態との奇妙な組合せをもっている國の社會體制を鋭く分析し、それによってファシズムや世界戦争の發生を豫見したのであるが、リースマンはこの點について次のような評價を行っている。

「彼〔ヴェブレン〕はある人々からは『ドイツ帝國と産業革命』において現代の全體主義を豫言したという榮譽を與えられている。……しかし、それは日本に關してはほぼヴェブレンが豫言した通りに實際に現われたけれども、ナチズムを理解するためには、それは全く不十分であった。ナチズムの動機や方法の理解ということになると、ヴェブレンはほとんど、彼が嘲笑した19世紀の功利主義者や『古典派經濟學者』と同じように手が届かなかつた。ヴェブレンの分析の體系の多くは現在ではあまりに單純であつて、同時代の社會を理解するには十分でないように思われる。」(op. cit., xii)

「2年後ヴェブレンが『平和の性質』を出版し、さらにその後『特權階級論』を出版するようになると、彼は資本家間の鬭争としての帝國主義の眞正マルクス主義(ホブソン、ヒルファーディング、レーニン)理論に轉向した。そして彼は反對諸國に對してソヴィエトの側に立った。その理由の一半はおそらく『ソヴィエト』という言葉が彼をして國家は事實廢止され、産業共和國が現われたと考えしめたことであろう。」(p. 138)

このような見方は例えばポール・スウィージー (Paul M. Sweezy) の *The Present as History*, 1953 に收められた『ソースタイン・ヴェブレンの強みと弱み』における評論とは全く異っている。彼は「平和條約はドイツや日本のような專制國家が存在しなければ實行可能であるし、それではなければ不可能であるかもしれない。これに反してこれらの企業的國家組織がある場合には平和條約は全く成功の見込がない。」というヴェブレンの *The Nature of Peace* の中の一句を引用した後、「彼〔ヴェブレン〕の悲觀論は長い眼でみれば十分に正しいことが判つた」(op. cit., p. 296) とかいている。スウィージーの見解によれば、1918年のドイツ革命はロシアの場合と異り、舊い秩序を一掃することができなかつた。反動勢力は時を待っていただけであり、結局、連合諸國の默認の下に、ヒットラー獨裁の形態をとって權力的地位に復歸した。「もしもヴェブレンが生きていてそれを見たなら

ば、彼は必ずや深く悲しんだであろう。けだし彼はおそらく直ちにその事態のすべての意味を理解したにちがいないからだ。しかし、それと同時に彼がさぞ驚いたであろうとは、とても言えそうもない。」(op. cit., p. 296)

1950年に出版されたスタンレー・ドウガートの『ソースタイン・ヴェブレンの哲学』は、ヴェブレンがカント、スペンサー、ポーター、ベラミー、ジャック・レーブ、パース、ジェイムス、デューイ等の諸學者からうけた影響を詳細に分析し、それによってヴェブレンの哲學的立場を解明しようとした労作であって、ヴェブレンの鋭い文明批評や社會變革的意識については十分な理解をもっていないように見えるが、それでも次のようにいうことによつて、ある程度現代的な問題意識を反映せしめている。

「……さらに一層重要なのは、産業技術の現在の状態は容易にかつ十分に人類の必要を提供しようというヴェブレンの見解である。事實彼は近代産業は『並々ならず生産的』であること主張する。何ゆえに人類は、基本的必要物なしにすませねばならないのか、何ゆえに周期的な恐慌や不況に悩まされねばならないのかについては、何ら健全な技術的理由はない。」(op. cit., p. 103)

ドーフマンはそのヴェブレン評傳の最後にこうかいている。

「ヴェブレンの生活史のもうひとつの周期が現在できつつある。そして彼の影響の正しい性質についての問題はいまなお未回答のままに残されている。ヴェブレンは『たしかに皮肉な叫び聲をあげたし、この體制を銃弾で射った』という Edgar Lee Masters の言葉は、多くのヴェブレン追従者の十分にうけいれるところであろう。しかし、その叫び聲の性質はきわめて特異、複雑であり、その陪音はきわめて誤解され易いから、まるで見解が異っている人々が同じようにヴェブレンの權威を主張するのである。果して彼の思想は『有閑階級論を再版するには時を選ばない』とある學者が言ったほどに現實に一般の常識のなかに溶けこんでいるのであろうか。それとも彼はあまりにも時代に先んじていたために、他の學者がいったように、最良の經濟學者でさえも、やっと彼に追いつき始めたにすぎないのであろうか。『有閑階級論』の重要で深遠な意味は、その諷刺的な外貌に優位しているのであろうか。その答えは將來にかかっている。」(op. cit., 518)

全くヴェブレンの思想の中には限りなく豊富な知性の鑛脈が埋もれているし、またそれは、人々がいたくあらゆる問題について示唆を與える。「機械文明」のおそろしい矛盾と害悪が全人類をおびやかしているいまこそは、もう一度ヴェブレンの思想を掘り起すべきときである。

(小原敬士)